

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.151

多摩風土記（八重山吹）

平成十二年度の本誌本欄に、武州大谷村（町田市南大谷）の五十嵐浜藻の俳諧集「八重山吹」と翻刻を紹介した。最近、金田房子の「シーボルトの持ち帰った俳書——『八重山吹』の入手経路と安永三年刊『俳諧七部集』を読み、十歳の少女を含む女性だけのこの俳諧集の原本をシーボルトが持ち帰っており、ライデン大学にあることを知った。（健介）



俳句事始

「憲吉俳言」を繙く

戸川 晟

六十歳に成ったら俳句でも始めようかと漠然と考えていたところ、五十五歳の時に勧められた。未だ忙しい時であり相当迷ったが、六十歳に成った時に都合よく勧めってくれる人もいないかもわからないから、勧められたのが縁だと思い、入会することにした。その入会したのが「野の会」であった。野の会はご存じのように楠本憲吉氏が創設した会であり、憲吉氏は鬼籍に入り二代目の野先生が主宰だった。憲吉氏と行動を同じくした先輩たちがまだ健在で盛んに活動していた。二次会で飲んだ後延々と深夜まで議論は尽きない。熱き心を持った人たちであった。俳句は何も知らないで入ったが、酒が飲めるので最後まで

付き合った。話の内容は多岐に亘っていたようだが、何もわからない私は黙って聞き流すばかりであった。しかし、この人達をこんなに熱くする俳句とはいったい何なのだと感じていた。だから、入会してすぐに「俳句とは何か」と考えるようになった。始めて三十年未だに解らないで苦しんでいる。

楠本憲吉氏が野の会の会員のために書いた「憲吉俳言」という小冊子がある。これは主宰誌野の会の裏表紙に逝去の二か月前まで十年余に亘って書き継いだものを小冊子にまとめ上げたものである。平成元年八月の発行であるから、私が入会する五年位前に出来たものである。何故私の手元にあるか解らない。多分編集長が新人の私に配付してくれたのだろう。相当経ってからこれを見つけ、俳句に行き詰まるとこれをばらばらと拾い読みしている。一頁に二行または数行の物なので、三十分もあれば読める。

その中から幾つかを上げて、憲吉先生の考えをどう読み取るか、私は何を考えてこれを読んだかを綴ってみたいと思う。

(憲吉俳言以下省略) その1

俳句は真剣な遊びである。

俳句は優雅なまことである。

私の考えてきた俳句とは何かの解答が冒頭に出て来た。しかし、真剣な遊びとは何か。

憲吉氏は学徒動員で軍隊に入り、そこで伊丹三樹彦を知り句作を始めた。終戦で復員して日野草城を中心にした「まるめろ」俳句会を結成。俳句活動を開始。並行して慶応大学法学部に復学、卒業後同大文学部(仏文科)に入学して修了。その後、國學院大學修士課程を修了している。「灘萬」のぼんぼんという家柄もあるが、どうしてここまで学業に拘ったのか、俳句をやるには法科卒業では十分でないと考えたのではないかと想像している。そこまでして俳句界に入った人が「俳句は遊びだ」と言っても違和感が残る。私についていえば俳句は遊びであるという事は基本的に賛成である。それは現代俳句の某氏によれば「俳句でも」というような輩は遊芸派と分類されるこのことであるから。だから、憲吉氏と私が同じことを言ってもその中身は相当に異なる物だろうと考えられる。

その9

俳句は叙事詩である。

物をして情を語らしめるところに難しさがある。

初心者の頃は先輩たちから何度も物に語らせろと言われた。これは物をして情を語らせることを言っていたようだ。この時言われたことに、説明をするなどという事があった。

私の考えでは言葉はみな概念である。しかし、観念的な言葉

は人によって相当の幅がある。物も概念であるが見えるものであり子供の頃から見ているから、とんでもない物を想像することとは無い。机と言えはいろんな机はあるにしても、机を具体的に思い浮かべることができる。共感の種にはなる。観念的な言葉は何かが不足で説明したくなる。説明的な言葉を全てそぎ落として行く俳句の精神から言う、物に語らせるのが一番良いことになる。

その13

季語は俳句のヘソである。

人体にとってヘソはひとつであるように、一句一季語でなければならぬ。

その23

〈季語〉は単に季節を表現するボキャブラリーではない。作者と読者の心のかけ橋、魂のパイプ役を果たす、いつてみれば俳句の大切なヘソである。人間にヘソがひとつしかないように、俳句も一句一季語であるべし。

季語の本意という言葉をよく聞く。季語の、ボキャブラリーでない本当の意味という意味であるようだが、作者と読者が同じ季語に対する認識を持っていれば、それによって俳句の意味するところが良く伝わる。魂のかけ橋などと大袈裟に言われると吃驚してしまうが季語がそのように働くことは重要である。

季語がヘソの様に一句一季語と強調しているのは初心者に対する教示のためと素直に受け止めるとして、別の観点から一言言いたい。

憲吉氏は先にも書いたように戦後俳句を日野草城らと始めて

いる。日野草城はほととぎす（虚子主宰）を除名になっている。その理由は明らかにされていないが、聞くところでは無季俳句容認が一つの理由だそう。前衛グループはどちらかと言えば無季容認だから、憲吉氏もそうかと勝手に思い込んでいたようである。しかし、憲吉氏のイメージと若干あわないような気がする。

その36

五・七・五は心の琴線。

字余りはそのバリエーション。

基本は五七五で、バリエーションで字余りがあっても良いだろうという普通の考えである。字足らずについては曖昧になっているが。

その52

俳句は単にモノに神経を注ぎ五感を働かすだけではなく、作者のココロの強い働きかけがなければならぬ。

これを「主観写生」という。

弟子から、同じものを見て写生をすれば、同じような句が出来てしまうという質問に虚子が、同じ風景を見ても心を入れれば、人間の心は千差万別であるから同じものにはならないと答えたと聞いている。これを主観写生と言ったのは憲吉氏かも知れないが、もっと早い戦前の事だと思う。

ここで主観写生と抽象化しているが、人間は主観的動物で普通に通することが主観的である。だから、主観写生と言われても、具体的なものが浮かんでこない。心を入れるという事はアクセントを付けるという意味合いではないかと思うのだが

……。若干の違和感がある。

その80

理想をいえば浮ぶ俳句が俳句創作としては最高である。しかし、浮ぶためには常に作るという前向きな姿勢がまた、必要なのである。

俳句を始めた頃は俳句がどんどん浮かんできた。少し上達するといろいろな注意事項を考えたりで、スムーズに出来なくなる。

そう言った諸々の雑念を抜け出した領域に達した時、理想的な浮かぶ俳句ができるのだろう。それまでは作ったら捨て作ったら捨てる努力が必要なのであろう。

その105

書に、楷書・行書・草書とあるが、俳句は行書の文芸であってほしい。

楷書では俳諧性がなくなるし、草書では文芸としての鑑賞に堪え難くなる恐れがあるからだ。

俳句は固くてぎくしゃくしても駄目だし、崩れ過ぎてても駄目。中庸の整ったものが良いという事か。解ったような気がするが、抽象的でここで止まってしまう。

「憲吉俳言」の1225の内8つを選んで、その内容を私なりに繙いてみた。しかし、俳句を理解するには程遠いものと感じた。それとは別に得たものはあった。楠本憲吉氏は前衛的な人とイメージしていたが、実は虚子のようなオーソドックスな俳人で新感覚の人であるようだと思えたことである。

あけぼの集

廃校のタイムカプセル霾晦八王子青木 隆
 政治にはお金がかかる油虫八王子赤野 四羽
 透きとほる少年の声柿若葉国分寺秋山ふみ子
 にんげんを哀れとみなす羽抜鳥多 摩 足立喜美子
 青嵐ゴミ箱のなき首都聳ゆ小 平安達 昌代
 柿若葉天に無限の時間軸清 瀬 穴原 達治
 夕立や天気予報の大当り稲 城 新井 温子
 街路樹の中一本の合歓咲ける八王子荒川勢津子
 キヤパ展に祈る代田の夕陽にも町 田 有坂 花野
 行く春の景色を筆墨走るまま狛 江 有原 雅香
 父の日の能登の塗り椀掌に包む国分寺安西 篤
 毎日が厭になっても風は夏足 立 飯田 和子
 ありのまま生きて米寿や四葩咲く東久留米飯田 玉記
 祝宴のシャンパンはロゼ若葉の夜多 摩 石川 春兔
 紫陽花や万華鏡の迷い道小 平 石橋いろり
 山滴る石上から山の辺へ練 馬 石原 俊彦
 生きるとは覚悟欲望素数蟬八王子市川 春蘭

水音の豊かな小径若葉萌ゆ青 梅一ノ瀬順子
 涅槃図のどこに隠れて蚤虱狛 江 伊東 類
 犬に天寿木香薷薇はいま盛り町 田 稲吉 豊
 イエスタデイ脚韻のY伸ばす初夏町 田 今田 述
 水芭蕉祈りのかたちの尾瀬ヶ原京 都 岩佐ひすい
 葉桜の落葉に混じるゼロ戦忌武蔵野内田 牧人
 枇杷の実を月のしづくのごと啜る武蔵野江中 真弓
 亡き民とわが民乗せて飛ぶ螢府 中 大井 恒行
 網戸の目くづれはじめて母の声府 中 大石 雄鬼
 桜桃忌公園の象いなくなり日 野 大槻 正茂
 百均にかくも支払ふ春の暮八王子大谷みどり
 白靴の先から朝の森ひらく川 崎 大西 恵
 南天の花を散らすや小糠雨三 鷹 大森 敦夫
 ガザも暑と死者バチカンの沈黙は昭 島 岡崎たかね
 レベルフォー胡麻斑天牛侵入す三 鷹 小川 葉子
 五月晴れゆずり葉すつかり若葉かな飯 塚 奥野 亜美
 夕焼雲帰りのバスを待っている川 崎 尾崎 太郎

あけぼの集

緑さす書棚の隅の若菜集昭 島尾関 英正
 亡き人の買ひ置きの珈琲尽きて夏青 梅小野こうふう
 おしやべりを黙らせてゐる苺パフェ立 川片倉みちこ
 ゆりの木の花置き忘れたるころざし昭 島亀津ひのとり
 夏立つや駅階段を踏み締める 西東京河 順子
 花見の座オレにも呉れと犬の声立 川川島 一夫
 新茶容れ作陶の壺耀けり清 瀬神崎 幸子
 暑き日の人にしがらみ本に帯小 平城内 明子
 握り飯愁い晴れたる花いばら大 田小泉満知子
 早朝のバラ園の香を独り占め三 鷹高坂 栄子
 天気雨少し濡らして犬ふぐり 西東京 幸村 睦子
 父眠る大黒蟻に守られて府 中小林 育子
 才能という名の病蝮草町 田小山 健介
 三万六千人殺しても殺したりない国立 川今野 修三
 日本の佐藤さんたち花は葉に多 摩 齊田 仁
 傘ささぬ訳は曖昧花の雨昭 島坂本 空
 ぬけぬけと年を偽るサングラス 東久留米 佐々木克子
 繋ぎ目の無き真ん丸のシャボン玉府 中笹木 弘

母天へ梅酒になるを待ちあぐね府 中佐藤 栄子
 直にひく蟻は影ごと蟻も曳く調 布佐藤 茉
 推敲の跡透かし見る桜桃忌昭 島佐藤 光子
 夏夕べ古民家の蕎麦吸りおり八王子柴 れいこ
 若さとは何て柔らか春キャベツ杉 並島 彩可
 鮎のひれ手早くつつむ化粧塩足 利清水 弘一
 岩塩を挽くやピンクの冷奴 世田谷 鈴木 浮葉
 花粉症今日もティッシュの封を切る立 川鈴木かずえ
 新築の公衆トイレ燕来る小 平鈴木 寿江
 老人は緑に染まり樹となりぬ 小金井 鈴木 佑子
 守宮語の分かる母逝くひとりぼち町 田栖村 舞
 谿若葉古城めきたる発電所板 橋諏訪部典子
 あの頃の「暮しの手帖」夏帽子小 平関 梓
 花菖蒲人を指せず人差指調 布芹沢 愛子
 天下る受皿の数誘蛾灯小 平高瀬多佳子
 梅仕事したくてならぬ快復期 西東京 高原 桐
 松山に正岡の姓風薫る清 瀬谷村 鯛夢
 始めからこの程度です茗荷竹 国分寺 玉井 豊

あけぼの集

夢捨てじシュプレヒコール五月一日こがついっぴ 稲 城 玉木 康博
 雨三日亀など鳴いて欲しい宵日 野 玉木 祐
 蛩よ今も地球は青いのか立 川 田村 明通
 境内の山あぢさゐに手を合はす三 鷹 田山 光起
 一粒の雨はじまるに紫陽花忌 武蔵野 津久井紀代
 辞世とは蟻の背ほどの道急ぐ八王子辻 升人
 明治よりガラスの天井ジェンダー差 八王子 都筑 遊
 夏雲や礼をするとき足揃へ立 川 遠山 陽子
 その先は極上の笑顔ヒアシンス 西東京 戸川 晟
 ねじ花の表も裏も素顔です杉 並 飛永百合子
 人間の弱さ味方に燕の巢清 瀬 永井 潮
 愛猫の月命日の緑夜かな立 川 中條 啓子
 ひとはみな未完のままに雲の峰 西東京 中田とも子
 はつなつのスワンボートを岸に呼ぶ府 中 中矢 温
 雨垂れのリズム乱調虹立ちぬ 国 立 中野 淑子
 春の月一枚あけてある雨戸座 間 長野 保代
 旅立ちの夜は深深と夏の星 武蔵野 夏目 重美
 八十路とてスタートはある青嵐町 田 成戸 寿彦

寝返りくるりハイハイもして立夏 国分寺 南行ひかる
 老鶯や廃れしままの神楽殿 西東京 西川 五月
 手を離す稚児の一、二歩夏来る 世田谷 西前 千恵
 澤好摩失せたるあとの桐の花昭 島 西村 智治
 新しい制服の人に道を訊く三 鷹 拔山 裕子
 水芹のひとつかたまりの青さかな 八王子 沼田 博古
 迷いなく天を指したる松の芯三 鷹 根岸 敏三
 逃水や真実隠すカタカナ語三 鷹 根岸 操
 夏来たる初老けなげに添乗員小 平 野口 佐稔
 チャンネルは回すが正し昭和の日羽 村 野島 正則
 遠くより山鳩の声原爆忌 青 梅 萩原 美沙
 春雷や天神地神のジャムセッション 武蔵野 蓮見 順子
 夕立や竜馬が駆ける晋作も 武蔵野 蓮見 徳郎
 黄の菖蒲傷つきやすき性であり 小金井 平井 葵
 花アカシア幾星霜の水ぐるま多 摩 平山 道子
 新じゃがやあまのうずめの臍探す 八王子 広井 和之
 海女小屋に眠る乳呑み子あたたけし 調 布 藤原はる美
 竹婦人汝れは情けの抜け殻か練 馬 淵田 芥門

あけぼの集

野暮用の影を踏まれて更衣国 立前田 弘
 ここまで来た証にむしる白詰草国 立前田 光枝
 身ひとつで生きぬく術や蜘蛛の糸 国分寺 松井 彰子
 万緑の中我も一本の樹なり 八王子 松元 峯子
 いいないいね自己中の夏休みだ 東久留米 三池 泉
 風薫るパンダの耳が微動する 東久留米 三池しみず
 百合ひらく妻の誕生日の朝に 東久留米 三浦 禎三
 梅雨明けの浅草に乗る人力車 小金井 三浦 長閑
 ほうたるを包むかたちやにぎり飯 世田谷 三浦 文子
 ああ言えばこう裏返る春落葉町 田 三木 冬子
 囀を拾って一人いつもの木 東大和 水落 清子
 青嵐に叫ぶごと立つ空也像 三 鷹 水野 星間
 ロック座へするりと入る荷風の忌日 野 満田 光生
 薔薇はバラ私はわたし又明日 昭 島 宮腰 秀子
 介護と別居と離婚と日傘くるくると 調 布 宮崎 斗士
 四月には四月の顔の妻がゐる 国分寺 武藤 幹
 初はたる共に見ていた日の在りし 小金井 村井 一枝
 水馬に左脳のあるかやたら跳ぶ 熱 海 望月 哲土

地球儀に瓦礫の地帯スコール過ぐ 東村山 森本由美子
 辛夷咲く空を個室と思うとき 三 鷹 守谷 茂泰
 あじさいの藍にころろをうばわれる町 田 山崎せつ子
 麦は穂に忘れたきこと一つ増ゆ 東村山 山崎美紗緒
 額の花人の瞳をして猫のたま府 中 山本 徳子
 蜻蛉生まる初の飛翔の潔さ 八王子 山本ひまわり
 つくしんぼそそけて赤子に似たるかな多 摩 山本みつし
 空へ飛ぶわが魂よしやぼん玉調 布 豊 宣光
 当然のように暮いて酒場の灯稲 城 好井 由江
 秒針で計れぬ夜や桜降る 三 鷹 吉川 真実
 みんなみんな死んじまったよ葛の毘府 中 吉澤 利枝
 編み込みにチロリアンテープ 青嵐 小金井 吉田さとみ
 夏の夜のオーロラ無音シンフォニー 東久留米 吉平たもつ
 憂きことは地に置き夏の観覧車 国 立 吉村春風子
 日陰とて住み心地よし一輪車町 田 米倉 信山
 朔太郎の若き心としてあぢさゐ 小 平 我妻 民雄
 一式の夜具干されあり山開き 青 梅 渡部 洋一

足立喜美子

普段着が似合う夕日の葱坊主

前田 弘

収穫しそびれたか、それとも採種用にか、夕日影の中葱が葱坊主となって立ち並んでいる。「普段着が似合う」の措辞から平穩な日常のある晩春の野菜畑が彷彿とする。世界では戦があとを立たない。平和を希求する作者の心象風景を描いた御句に感銘。

荒川勢津子

見残せし八十路の果ての蜃気楼

吉澤 利枝

八十路もあと僅かになり、五官や体力の衰えているのを実感する昨日今日です。

富山湾の神秘的な自然現象をみることのみならず、思うばかりで為残しているあれやこれや……。この感情を作者は、詩情豊かに表現されている。

有坂 花野

風光る工事現場のベトナム語

小山 健介

境川の上流には春になると川芹が生い茂る。ある日誰も摘まないその芹を五、六人の女性達が熱心に摘んでいた。訊けば日本で働くベトナム人とのこと。労働と日本の昔ながらの食材確保を共有する外国人に「風光る」視線は大いなる連帯感。

飯田 玉記

ため息に抑揚のありライラック

芹沢 愛子

先ず笑ってしまった。歌でも音でもなく、ため息に高低とか強弱があるなんて面白い。それに、ため息を詩的にとらえ作句するなんて感性豊かな作者なのでしょう。リラの芳香にため息の人、凜となさったかも。とても楽しく面白いう句いただきました。

石川 春英

光る背を追へば父似や初大師

佐藤 栄子

初大師と言うと一月二十一日の弘法大師の縁日の事をさすが、多摩に住んでいると一月三日の川崎大師の縁日か思い浮かぶ。後姿がお父さんそっくりだったので、つい追いかけた。追い越して振り向けば、顔も何処となく似ている。心がぽつと暖かくなった作者だ。

石橋いろり

春禽の関関として雨あがる

我妻 民雄

春禽とは春の鳥の事。関関としては和らかに囀る様。雨が上がったのは、春禽のせいだと感じている作者。春禽も関関も少し硬い表現だが、座五の雨あがるの布石を打ったのだろう。視線は梢から雨上がりの空へ。景色も心持ちも一気に晴れ上がる。

一ノ瀬順子

心臓を寄せ合つてゐる子猫かな

大石 雄鬼

子猫が数匹体を寄せ合つて眠っているのだろう。上五、中七に子猫の愛らしさが読み手によく伝わって来る。何ともほほ笑ましい景である。子猫が無事に育つて欲しいと思う。今や犬、猫はペットとして大切に飼われている家族の一員であるのだから。

伊東 類

弾む指先ろう者二人や初桜

高瀬多佳子

耳の不自由な人にとって色々な通信手段があるが、この二人は指文字だろうか。指先が元氣よく弾むように動いている。初めてのお花見は誰にとっても楽しいもの。溢れ出る心の感動と繊細に動く指先が静閑な桜の世界の中で躍動している。

稲吉 豊

へソ天で寝落ちのねこや暖かし

大谷みどり

へソ天とは臍を天に向けてという事だろう。動物がこの姿勢を取る時は周囲に危険の及ばぬ状態を確信したことに他ならない。ユーモラスな猫の姿態はまさに「暖かし」だ。永年にわたる猫と飼い主の信頼関係は親子のそれに匹敵するものと言える。

今田 述
七歳の口調大人び進級す

一ノ瀬順子
可愛いだけでは済まされない。幼児の言葉は意外に豊富。学校教育でもっと意見を語り合う時間を増やし、議会でも書いたモノを読むのではなく欧米先進国並に討論すべきだ。

内田 牧人

煮凝の舌に溶けたり妻の留守

武藤 幹

妻の残した昨夕の料理を朝食べている作者、煮凝！情景と想いが浮ぶ、「季語・想いの叙述」で構成された佳句。俳句には囁目・心象想いがあるが、純囁目は稀で心象想いを加味したのが大半、掲句は季語に対し叙述を如何に修辭しているかが判る。

大森 敦夫

沢庵のやや枯れていて所沢

西村 智治

地名を入れた俳句が好きです。この句は身近な所沢を取り上げていますが、埼玉の乾いた冬の空気になんとも沢庵がよく合っていて、昔ながらの農家の軒先が目に見えます。この句は沢で始まり、沢で終わっているところも凝っています。

尾崎 太郎

春愁を吸い取る青い空があり

永井 潮

晴れた空だけがある、シンブルな風景の句です。少し潤んだ空でしょうか。春愁という重たさが消えたあとに残るものが何か、分かりません。でも、その分からなさがこの句の何とも言えない余韻になっているように思われます。

小野こうふう

丸三角四角に老いて春惜しむ

城内 明子

傘寿も過ぎると誰もが丸くなると言うが、それは周りの者が丸くなってくれと願っているのではないか、特に四角い人に對しては。嫁が来ないのは彼女のせいと噂されたほどの義母が先月95歳で亡くなった。存分に生きた死に顔は笑顔であった。

門野ミキ子

言い訳その1その2その3春炬燵

宮崎 斗士

「その1その2」だけで、すっかり中七に収まるところを取えて「その3」を入れて字余りにした。暖を取るよりも団欒の場になっっている春炬燵の賑やかな様子が活写されている。夫婦？親子？言い訳のやり取りが楽しい。

亀津ひのとり

折鶴に脚ほしき日の深雪晴

中野 淑子

折鶴を折って、机に飾って見る、窓の外を眺めるとおりしも美しい深雪晴れ。折鶴に脚があれば、かの丹頂のように変身して雪の上を舞い上るのは、という美しいイメージの一句。折鶴と深雪晴れの取り合わせの妙に感心しました。

神崎 幸子

被災地の蛇口の水に春の音

吉平たもつ

災害は突然来た。しかも新年を迎えた人々の上に。何と悲しい事か。ライフラインが断たれ生きる力を失い途方に暮れた日が続いて、今やつと水が使える日。春です。遠方より応援する私たちには胸がつかま、頑張れと同感する一句です。

小泉満知子

煮凝の舌に溶けたり妻の留守

武藤 幹

留守中の夫のために煮凝を作り置きする妻。妻のいない淋しさの中で優しさを感じて煮凝の味。離れて思い合うのも素敵です。

高坂 栄子

春は待つものゝ切は迫るもの

斉田 仁

期日までにはやらなければいけないのに、なかなか腰がさがらず、いよいよメ切が迫ると慌ててとりかかるのは私ばかりでないのでしょうか。それに比べ寒い冬の間早く春にならないかと待遠しい。ふたつの対比が面白く共感した。

小山 健介

僕は漢字の海に消えそう元日地震

川島 一夫

元日夕、ウィーン・フィルの中継を待っていた。緊急地震速報から、地震、津波、断層、全壊、隆起等が軍事用語に加わり、言葉の海は漢字の海となった。その海に飲み込まれるという作者の思いが「僕は」から伝わる。あの日の僕の思いでもあった。

笹木 弘

極楽は知らねど今日の餅ふくれ

飯田 和子

正月に欠かせない餅、関東は角餅、関西は丸餅と知られている。色々トツピングし食べることが出来る。餅を焼くと熱により少しずつ柔らかくなり、最後には大きく膨れる。この状態を極楽と見たのだろう。美味そうに膨らんで楽しい一句となった。

島 彩可

日に一度鉢の向き変へフリージア

水落 清子

おそらくフリージアにとつて最適な日の当たり方を工夫なさっているのだろう。植物は好きな場所に動くことが出来ないのだから、好ましい場所を用意してあげなければならぬ。些細な行為にフリージアへの思いが余すことなく込められている。

徳山 優子

風光る左廻りの競馬場

幸村 睦子

競馬場に左廻りと右廻りがあるのも知らなかった。ただそこを捉えたのが良いと思った。季語の「風光る」がきいている。疾走する毛並まで見えてきて美しくきらきらと輝いている。気持の良い句だと思います。

中條 啓子

言い訳その1その2その3春炬燵

宮崎 斗士

寒いけれど、湿気を帯びた空気は確かに春。こんな日に炬燵に入って怠惰に過ごすのは快感。言い訳は幾つだって思いつく。一読で印象に残る平明さ、泰然とした諧謔、飾らない日常風景が良いです。

中田とも子

言い訳その1その2その3春炬燵

宮崎 斗士

人間味溢れる句、大好きです。エアコンでは、その1か、その2くらいまででしょう。じんわりと暖かな炬燵ならは……。「春炬燵」拔群の季語です。正に、ドラマの一場面、感服！

中野 淑子

春は待つものゝ切は迫るもの

斉田 仁

日頃誰もが掲句のような体験をしているので一読ストレートに心に届く。「待つもの」「迫るもの」の対比が明瞭で面白く納得させられるのである。私は日常雑事の中で「迫るもの」を目下体験しているところである。

長野 保代

紅梅の花の数だけ日の温み

吉村春風子

紅色の花の梅をいう紅梅は白梅の持つ高貴な雰囲気のない親しみが有り、花期は白梅よりやや遅い。中七から下五の表現が素晴らしい。青空に映える紅梅、鳥たちはよく知っている。番で遊びにやって来る。

西川 五月

春塵舞う唐人お吉の小さき墓

岩佐ひすい

下田は何度も訪れた郷愁の地。この小さきに寄せる思いに共感。お吉は芸者ではなく船乗り達の洗濯女だったとか、お吉の写真も別人との事。歴史を改ざんしハリスの人格や日本開国の功績を歪めている事は大きな問題。三月二十七日が命日。

抜山 裕子

避難所に届く給水水温む

安西 篤

水は命の源という。各地の避難所で給水待つ人の列。遠路給水車で届く水、壊れた配水管を徹夜で修理する作業員、ボランティアの人々。やっと届いた水は、多くの人の心の籠った温かい春の水だ。

根岸 操

農に生き青麦匂う背筋あり

森本由美子

季語の「青麦」で俳句を詠んだことはない私ですが、母の実家に遊びに行ったとき勢いよく青々と伸びた麦畑に接したことを思い出しました。叔父も農を継いだ従弟も亡くなりましたが、確かに青麦の匂う背筋を感じたのです。

野口 佐穂

ひとり住む母の元氣や福寿草

小野こうふう

核家族化は避けられない現実だ。一人住まいの母を久しぶりに訪ねる。元気でホッとす。母はむしろこちらのことを心配してくれるが、いつまでもこのままでいいかと思う。解決策はまだない。庭の福寿草が愛の光のように咲いている。

平山 道子

丸三角四角に老いて春惜しむ

城内 明子

地域のデイサービスへ通い始めて半年が過ぎた。そこは運動特化型を標榜する、介護度の低い老人達が集ってくる施設。半日を共に過ごす中で多様な老いの姿に触れ考えさせられることが多い。老いの真髄として「丸三角四角」の比喩は重く鋭い。

藤原はる美

待春の間取り図に書く家具配置

高坂 栄子

新しく建てる家の間取り図を広げて、家族がそれぞれ意見を聞かせているのでしょうか？家具の配置によって部屋の雰囲気は全く変わります。作者とそのご家族の弾むところが読み手にも伝わり、こちらも楽しくなりました。待春の季語が効いています。

冬木 喬

また一つ廃校が増え竹の秋

渡部 洋一

三月の卒業シーズンには小中学の廃校や統合がニュースになる。今年も山村の小学校に一人の卒業式があった。残る三人の在校生は遠くの学校に通うことになり、百年余りの校歴の幕を閉じた。廃校は至る所にあることを示唆した一句。

松元 峯子

春愁を吸い取る青い空があり

永井 潮

萌え出づる春、何となく気が塞いで、物憂い。そんな日は外へ出て空を見上げよう。悠々と広がる青い空。「何をうじうじとしているのだ、前へ進もうよ」と叱られる。愁いなど吸い取ってくれる青い空。私は何度も、あの青空に勇気をもたらった。

三池しみず

下萌や古墳群を目覚めさす

根岸 敏三

さきたま古墳群のことでしょうか。美しい情景が目につかぶ秀句です。私は子供のころ高松市と奈良市の市街地に住んでいました。家の近くには高松では石清尾山古墳群、奈良では佐紀盾列古墳群があり、なつかしい気持ちになりました。

宮腰 秀子

たとう紙に包んで久し春着出す

鈴木かずえ

春になり良い事があつたのでしよう。和服にしようと思ひ立ち、筆筒に仕舞つたままの着物を取り出す。時代が変り筆筒の肥やしとまで言われる昨今、懐かしさと共に思ひ出す数々。たとう紙と聞いた時の、あの匂いまでが伝わる心に浸みる佳句です。

武藤 幹

丸三角四角に老いて春惜しむ

城内 明子

面白いが、少々あざといかと思ひながら二度三度読み直した。「老い」には様々なカタチがある。深淵ともいえるその真実を、「丸三角四角に老いて」とは。あざとい処ではない、実に見事である。「春惜しむ」との取り合わせも秀逸だ。脱帽である！

村井 一枝

春愁を吸い取る青い空があり

永井 潮

満開の桜。春は桜へと心が弾みますね。やがて道には桜蕊が一杯降っている。それを目にするとは何故ともなく寂然となる。春愁とも。そんな時、何気なく仰いだ空が青く晴々としていて春の愁いを一気に忘れさせてくれたのですね。

森本由美子

心臓を寄せ合つてゐる子猫かな

大石 雄鬼

生後間もないため、まだ目や耳が機能していないのか、お互いに心臓の鼓動を弄りあつて生を確認しているのだろう。愛おしい。軽く握つてみたい衝動に駆られる。生き物への瑞々しい讚美を感じる。

米倉 信山

啓蟄やうつかりミスの増ゆる日々

中田とも子

うつかりと間違いを起すことが増えてきたのは忙し過ぎるのか、老いからか、と想像をしてみようが、季語の啓蟄により、最近起こる熊の出現が目に浮かぶ。一挙に日常から気候変動へと思ひを誘う。まさに季語の為せる業、少し想像が飛躍し過ぎか。

あけぼの便り

○鈴木佑子様、前号で拙句を鑑賞して頂き有難うございます。殊に表記の効果を上げていただき望外の喜びです。

(秋山ふみ子)

○安西篤様、前号で拙句をご鑑賞戴きまし

て有難うございました。嬉しく拝読させて頂きいただきました。

(荒川勢津子)

○先の陽春句会で拙句を六名の方々に選んで頂き、有難うございました。遠山陽子様にはご自分の句を書かれた色紙も送って頂き重ねてお礼申し上げます。

(一ノ瀬順子)

○青木一郎様、前号で「指先」の拙句を鑑賞していただきありがとうございます。感謝申し上げます。

(大谷みどり)

○吾が老猫が行方不明になりました。心配で心が乱れております。

(奥野亜美)

○小さな手術をして二日入院。一病息災ならぬ三四病息災、おまけに耳が遠くなつてウェアラブル・スピーカーをつけてテレビを聴く始末。何とも面倒くさいことです。

(亀津ひのとり)

○本場の新潟コシヒカリのおいしさに感動。おいしさに幸せを感じます。重いのにお土産を買ってきてくれた娘に感謝です。

(小泉満知子)

○風薫る五月、沢山句を作つて……と気持ちばかりでさっぱりなの頃です。年のせいではないはず、もう少し頑張つてみたいと思います。

(佐々木克子)

○足利市に開局したFM放送の歴史探訪という番組に第一回「日本遺産・足利学

校」、第三回「国宝饒阿寺」の原稿を書きました。どちらも観光ボランティアガイドをしている観光名所です。明日は対談方式の録音を行います。（清水弘一）

○高瀬多佳子様、前号での拙句へのご鑑賞ありがとうございます。週一回のデイサービスへ通っています。健康は有難いと思うこの頃です。（鈴木かずえ）

○いろいろ様、編集の仕事に労りの言葉を賜り有難うございました。それ以上にいろいろさんは、多摩句会の運営を率先、行動されていて頼もしいです。（関 梓）

○新入会員です。はじめて投句します。よろしく願いました。多摩のあけぼの」は内容、量とも私にぴったりです。（田村明通）

○新緑の美しい季節ですね。世界中が平和でこの季節を楽しむことができればどんなに良いでしょう。（飛永百合子）

○今は物価高です。でも食べる物があるだけで何とかなる！と思えるのは戦後の食糧難を生き残ってきた為でしょう。日々ウクライナやガザの人々のことを思ってしまう。「生かされている」という実感。感謝です。（中田とも子）

○お世話になります。皆様の俳句、楽しく拝見しております。（長野保代）

○一日一日があつという間に過ぎドタバタと暮らしております。年のせいかと情けない思いもしますが、何とかガンバリたいです。（西前千恵）

○初めて投句致します。どうぞよろしく願います。（沼田博吉）

○陽春句会良かったですね。大森さん、作品集の発送ありがとうございます。（根岸敏三）

○夏目重美様、鑑賞していただき嬉しかったです。私としては冒険句でしたが、『俳句』三月号にて二人の選者が佳作に採っていました。俳句って、読む人あつての文芸ですね。（根岸操）

○このところ毎月の俳句研究会への参加が疎遠になってしまいました。少しでも出席して皆さんと俳句時間を楽しみたいと願っています。（野口佐絵）

○ブレーカーの点検をしようと椅子に乗ったらバランスを崩し落ちて尻もち。胸椎椎体骨折で手術を受け、八カ月も入院しやっと退院しました。（藤原はる美）

○差繰りし月例研究会に再び参加している。やや難聴で合評ではご迷惑をかける。平均年齢七十五歳以上の我ら、足弱難聴なんのなんの。老いるのは肉体でなく精神の衰えだ。（淵田芥門）

○川島様、前号にて拙句をご鑑賞いただきありがとうございます。多摩句会になかなか参加できずすみません。（前田光枝）

○萩原美沙様、前号にて拙句をご鑑賞いただきありがとうございます。嬉しく元気を頂きました。（松元峯子）

○前号で現代俳句協会の法人化について丁寧に説明が書かれていて納得致しました。「俳句自由」を心に一層がんばりたいと思っています。（三木冬子）

○佐々木様、飛永様、前田様、前号で拙句を深く鑑賞していただきありがとうございます。悶々とした日もある私ですが、勇気をいただきました。（水落清子）

○コロナはすっかり彼方へ遠退いた感じなのに、どの句会も出席者数がコロナ前の水準になかなか戻りませんね。高齢化＋コロナは、俳句に大きな痛手でした。それぞれご事情があるかと思えますが、来られる方は是非句会に積極的に来ていただきたいものです。そして俳句を作る人をふやすこと！「プレバト!!」の夏井いつきさんのお蔭で俳句に興味を持つ人は多いのに、作るころまではいかない。ここを何とか出来れば明るい未来が開ける気がします。（満田光生）

（P17下段に続く）

令和六年度 定時総会・陽春句会

令和六年三月二十三日(土)
於・武蔵野スイングホール

仲春とはいえ寒さも時折顔を出すこの日、令和6年度定時総会と陽春句会が開催されました。全員で会歌「多摩のあけぼの」を斉唱後、満田光生幹事の司会により戸川晟副会長の開会の言葉で会は始まりました。

吉村春風子会長の挨拶に続き、ご来賓の東京都協・佐怒賀正美副会長、神奈川県協・芳賀陽子会長、千葉県協・岡田春人事務局長の御三方より祝辞を賜りました。

定時総会

議長に石原俊彦氏、副議長に山本ひまわり氏を選出し議事に入りました。

第1号議案 二〇二三年度事業報告

第2号議案 二〇二三年度収支報告及び

会計監査報告

第3号議案 二〇二四年度事業計画案

第4号議案 二〇二四年度収支予算案

第5号議案 二〇二四年度役員改選の件
事業の第1号議案及び第3号議案については事業部長の石橋いろり氏が、予算の第2号議案及び第4号議案については経理部長の根岸操氏が、また第5号議案については事務局長の大森敦夫氏が説明を致しました。

以上右の議案が審議され、原案通り、承認、可決されました。(石原俊彦記)

陽春句会

投句数69句、当日の出席者は38名でした。投句数は昨年を大きく上回りました。

上位入賞者10名と特別選者の特選句は16〜17頁の通りです。上位入賞の方々は当協会からの賞品が、特選句の方々は特別選者の特選賞が、それぞれ授与されました。

来年度は更に投句者・出席者ともに増えて、盛況となることを期待します。

(満田光生記)



総会全員写真



退任の吉村会長へ秋山ふみ子さんから花束



陽春句会1位の野口さん(右)



来賓の皆様
(左から岡田氏、芳賀氏、佐怒賀氏)

2023年度（令和5年度）
収支決算報告書

1. 収支状況（令和5年1月1日～令和5年12月31日）

		前年度実績	予 算	実 績
収入	本部助成金	355,000	360,000	360,200
	地区会費	94,000	120,000	84,000
	事業収入	513,500	836,000	557,520
	雑収入・寄付	1,006	1,000	344
	計	963,506	1,317,000	1,002,064
支出	事務費	14,288	15,000	21,571
	通信費	28,032	30,000	16,830
	印刷費	56,320	30,000	23,650
	会報費	512,415	520,000	517,533
	会場費	0	5,000	0
	交通補助費	30,000	30,000	21,500
	交際費	0	25,000	2,804
	事業費	522,512	530,000	526,255
	会議費	0	30,000	7,360
	雑費	3,560	4,000	2,910
	計	1,167,127	1,219,000	1,140,413
	(*)収支差額	△ 203,621	98,000	△ 138,349

(*) 前期末資金残554,583円（下記2.）に、当期収支差額実績（△138,349円）を加えたものが、期末未資金残416,234円）である。

（備考）当期事業費の収支状況

事業項目	収 入	支 出	収 支
総 会	52,000	84,879	△ 32,879
俳句大会	316,000	364,788	△ 48,788
吟行会	58,020	47,184	10,836
研究会	131,500	29,404	102,096
計	557,520	526,255	31,265

2. 資金状況

現金預金内訳	前期末	当期末	増 減
手元現金残高	0	28,764	28,764
普通預金残高	554,583	387,470	△ 167,113
合 計	554,583	416,234	△ 138,349

総会資料の概要

2024年 俳句研究会及び行事案内

◆俳句研究会	開催地
第1回 令和6年 1月27日（土）幹事会	立川（子）
第2回 2月24日（土）	立川（子）
第3回 3月30日（土）幹事会	立川（子）
第4回 4月27日（土）	立川（子）
第5回 5月18日（土）幹事会	立川（子）
第6回 6月22日（土）	立川（子）
第7回 7月20日（土）	立川（子）
第8回 8月24日（土）	立川（子）
第9回 9月28日（土）幹事会	立川（子）
第10回 10月26日（土）幹事会	立川（子）
第11回 11月23日（土）	立川（子）
第12回 12月14日（土）幹事会	立川（子）

午後1時より句会、合評。句会に先立つ講話は3ヶ月に1回実施。

開催地の（子）は、立川市子ども未来センター。

◆主な行事	
2024年度 定時総会・陽春句会 3月23日（土） 会場 武蔵野スイングホール	武蔵野市 （武蔵境）
初夏の吟行会 6月1日（土）正福寺・北山公園 句会場 サンバルネ	東村山市
秋の吟行会 10月13日（日）府中市郷土の森博物館 句会場 同所	府中市
第42回 多摩地区俳句大会 11月4日（月・祝） 会場 武蔵野スイングホール	武蔵野市 （武蔵境）
◆会報「多摩のあけぼの」編集発行	
令和6年（1月 5月 7月 10月） 各月の25～30日頃発送予定	

二〇二四（令和六）年度
役員改選

新執行部（新任は△）

（○印は常任幹事、監査役を除く無印は幹事）

会 長 水野 星間△

副会長兼幹事長 根岸 敏三

副会長兼広報部長 永井 潮

副会長兼広報部長 山崎せつ子

副会長兼事業部長 戸川 晟

副会長兼総務部長 石橋いろり△

副幹事長兼総務部長 小山 健介

副幹事長兼経理部長 根岸 操

副幹事長兼事業部長 蓮見 徳郎

事務局次長 大森 敦夫

広報部長 満田 光生

広報部長 飛永百合子

事業部 青木 隆△

同 石原 俊彦

同 山本ひまわり

同 尾崎 太郎△

総務部（事務局） 亀津ひのとり△

経理部 玉木 康博

同 秋山ふみ子

監査役 佐々木克子

同 大石 雄鬼△

退任 吉村春風子（顧問に就任）

会長 関 梓

広報部

令和六年度 陽春句会作品

〈入賞十句〉

つなぐ手は互いの介助春の雲 野口 佐稔
 葱切つてあと十年は生きてやる 米澤 久子
 春耕や土は混声合唱団 芳賀 陽子
 削られし武甲の山も笑いけり 一ノ瀬 順子
 梅咲いて誰か訪ねてくる予感 蓮見 徳郎
 なまはげの落していた薬二本 佐々木 克子
 独り居の父訪ふも旅はじめ 秋山 ふみ子
 うりずんの海揺れ輸送機の轟音 満田 光生
 笑うことも泣くこともなき紙雛 笹木 弘
 どの家も夜が来ている雛祭 好井 由江

〈以下到着順〉

ひとり住む母の元氣や福寿草 小野 こうふう
 春惜しむセピア色なす写真かな 三浦 土火
 十二単の陽光探す春野かな 石橋 いろり
 湯豆腐のにえばな食し一家言 清水 弘一
 裾長々と平安のひと梅の香と 川島 一夫
 行く先は決めず初秋の風の駅 宮腰 秀子
 図書館の椅子は直角ヒヤシンス 根岸 操
 春一番心のどこかで待っている 飛永 百合子
 避難所に届く給水水温む 安西 篤
 白梅や白の中には何言わん 根岸 敏三

つきまとう春愁信号は青 森本由美子
 良く老いて梅のあしたを待つばかり 稲吉 豊
 立春と声にしてみる雨に色 水落 清子
 カピバラの薄きかんばせ春の風 片倉みちこ
 雪国の青い夜明けの地平線 松元 峯子
 北窓をひらき心のストレッチ 関 梓
 銭湯の灯りて映ゆる門の梅 大森 敦夫
 春節や銀座通りに異国の香 山本ひまわり
 物の芽の声なき声が聞こえる 長野 保代
 三針の時計で春がやって来る 永井 潮
 煽らるる鷹もわが身も春一番 亀津ひとりのり
 春空へ枝打つ庭師の命綱 西前 千恵
 春の猫野生の闇を出入りする 岡田 春人
 田子の浦今汽笛なる紅き不二 玉木 康博
 砂山の三つ並んで寒夕焼 高瀬多佳子
 春は曙というけどまだ眠い 三池 泉
 冴え返る諦めぬやう頬を出す 広井 和之
 大寒や目覚めてすぐの深呼吸 鈴木 寿江
 横山の見返り峠風光る 尾崎 太郎
 雲割れて三月兔の子だくさん 有坂 花野
 花冷えや母連れ出でし日の桜 淵田 芥門
 土星の環に並べてみたき路の臺 佐怒賀正美
 鳥帰る陰画の能登を置き去りに 望月 哲土
 春耕の土黒黒とにおいけり 戸川 晟
 大提灯から参道の春の雪 小山 健介
 春一番防空壕へキーウ市民 青木 隆

引揚げてよくぞ八十路の春迎ふ 石原 俊彦
 余寒なほ時には枷となる絆 吉村春風子
 半分は眠りにまぎれ梅咲けり 大石 雄鬼
 冴返る夜や忍び手に友を送る 水野 星閣
 どんよりと曇りて雪になる気配 山崎せつ子
 指で掘る地球の隅の春の泥 前田 弘
 草青むおもいおもいの視線で 前田 光枝
 淡雪の水より少し明るさか 大井 恒行
 職安の前に群る影春浅し 山本みつし
 白菜割るや火炎光背踊るる 鈴木 浮葉
 フェルメールの少女の瞳春の闇 新井 温子
 元妻の認知が進む春の星 田山 光起
 ガザの子供の心の冬芽むしる日々 武藤 幹
 老鶯に誘はれてゆく札所径 諏訪部典子
 乳飲み子のあーうー魚は水に上る 伊東 類
 両の手で溢さぬやうに雛あられ 大槻 正茂
 七十七歳 桜の洗礼うけにゆく 三浦 文子
 立春や猫のまなざし猫のちえ 山本 徳子
 老松の風に抗ひ緑立つ 夏目 重美
 春雪や母の遺品の筆硯 吉澤 利枝
 惜別の飛翔ととのへ白鳥引く 足立喜美子
 頬に髪にミストのような春の雨 石川 春兎
 人死んで生まれて生きて草萌ゆる 江中 真弓

《句会選者の特選句》

佐怒賀正美 選	乳飲み子のあーうー魚は水に上る	伊東 類
芳賀 陽子 選	鳥帰る陰画の能登を置き去りに	望月 哲土
岡田 春人 選	春耕の土黒黒とにおいけり	戸川 晟
安西 篤 選	つなぐ手は互いの介助春の雲	野口 佐稔
前田 弘 選	春耕や土は混声合唱団	芳賀 陽子
遠山 陽子 選	削られし武甲の山も笑いけり	一ノ瀬順子
冬木 喬 選	独り居の父訪ふも旅はじめ	秋山ふみ子
三池 泉 選	春節や銀座通りに異国の香	山本ひまわり
三浦 土火 選	うりずん海揺れ輸送機の轟音	満田 光生
江中 真弓 選	なまはげの落していった藁二本	佐々木克子
津久井紀代 選	どの家も夜が来ている雛祭	好井 由江
大井 恒行 選	つなぐ手は互いの介助春の雲	野口 佐稔

佐々木克子 選	つなぐ手は互いの介助春の雲	野口 佐稔
水野 星闇 選	春耕や土は混声合唱団	芳賀 陽子
吉村春風子 選	北窓をひらき心のストレッチ	関 梓
根岸 敏三 選	人死んで生まれて生きて草萌ゆる	江中 真弓
永井 潮 選	北窓をひらき心のストレッチ	関 梓
山崎せつ子 選	春耕の土黒黒とにおいけり	戸川 晟
戸川 晟 選	葱切つてあと十年は生きてやる	米澤 久子
山 健介 選	白菜割るや火炎光背踊るる	鈴木 浮葉
根岸 操 選	老松の風に抗ひ緑立つ	夏目 重美
蓮見 徳郎 選	なまはげの落していった藁二本	佐々木克子
石橋いろり 選	鳥帰る陰画の能登を置き去りに	望月 哲土
大森 敦夫 選	白菜割るや火炎光背踊るる	鈴木 浮葉

(P13下段から続く)

○このままだと今年十一月にはトランプが米大統領に返り咲く可能性が七十五%だ！大震災、大災害が世界中で発生の現在、人災は止められないのか。プーチン、習近平の今後数年の独裁は決まった中、本当にトランプで良いのか。私は今、無駄になる可能性大の運動を七十六歳になっても懸命に続けています。米国のスタンフォード大学他学生への説得等の活動です！俳句界の皆様も少しは関心をお寄せ下さいませ。

(武藤幹)

○毎年ながら一月から五月を特に早く感じています。長い夏になるのでしうか。暑さにどうぞお体をおいとい下さい。

(村井一枝)

○斉田仁様、前号にて拙句をお採り上げ戴き誠に有難うございました。励みになります。

(山本みつし)

○マーガレット、昼咲き月見草、サツキなど今年はたくさん花盛りとなつて庭全体がピンク色になり眼を楽しませてくれます。梅雨の季節となりますが皆様どうぞご自愛ください。

(吉川真実)

○初めての投句です。年甲斐もなく可愛らしいチロリアンテップを髪に結んで仕事に行きました。ちよつとウキウキした気分です。

(吉田さとみ)

第1回 俳句研究会

1月27日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 根岸敏三・秋山ふみ子・

玉木康博・石橋いろり・

石原俊彦・山本ひまわり・

大森敦夫

参加者25名

★講話なし

先ず入れし句会日程初暦 石原 俊彦
ひとり住む母の元氣や福寿草 小野こうふう
戦争と地震と火事と初日記 小山 健介
雑炊をゆつくりすり喪に服す 佐々木克子
一病といふ息災や耐へて寒 吉村春風子
あれこれの想ひも焼べてどんな 亀津ひのとり
日脚伸ぶ雑木林に耳澄ます 尾崎 太郎
しめやかに燭はぬるめの歌心 戸川 晟
急行通過駅の花壇の水仙花 大森 敦夫
もぐら塚をよけて歩けり梅白し 根岸 操
足なへを託つ逍遙やぶ椿 三浦 土火
スコルの齧^はれてガムランおんぐおん 満田 光生
連れ帰る母の手返る知らぬ道 淵田 芥門
衣ずれの音折りたたま納棺す 森本由美子
手術成功六日の待合室 飯田 玉記
冬晴れてからすが横断歩道行く 山崎せつ子
熊の子は濡れてこの世にうごきだす 大石 雄鬼
G線の音のかそけき寒の入 水野 星閣

能登珠洲の意地の再開寒鰯 青木 隆
一礼し鳥居をくぐる冬麗 松元 峯子
いつの間に地べたにゐたる寒鴉 秋山ふみ子
体操を見下ろしてゐる寒鴉 山本ひまわり
山壁が裂けど聳える白き富士 玉木 康博
炊き出しの小豆粥ふつと脱力 石橋いろり
松の芯空に向いて伸びらかに 根岸 敏三

第2回 俳句研究会

2月24日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 満田光生・玉木康博・

佐々木克子・小山健介・

石原俊彦・石橋いろり・

尾崎太郎

参加者24名

★講話なし

参加者各自が自分の作句工房を披露
物干に背伸する母日脚伸ぶ 高瀬多佳子
紅梅の花の数だけ日の温み 吉村春風子
水仙の風にあらがう気骨あり 佐々木克子
雀来る二月の光柔らかく 尾崎 太郎
喇叭水仙壺に海軍カレーの日 稲吉 豊
五階まで匂ふ白梅日和かな 亀津ひのとり
白梅紅梅遅速のあつてこそ楽園 広井 和之
春鰯こぼして行くよ猫車 三浦 土火
盆梅を裸体のやうに部屋に飾る 大石 雄鬼

多満自慢嘉泉澤乃井土筆和 満田 光生
早春の路地駆け抜けるランドセル 石原 俊彦
春宵や彼処に此処に夫の跡 飯田 玉記
朝市のきれいに洗う春野菜 戸川 晟
寒肥はしょんぼりしている木から撒く 松元 峯子
静寂射るひかり一条寒明けぬ 水野 星閣
山の上ホテル休業春寒し 青木 隆
寒中で寒鰯も怯えなむ続く 玉木 康博
光る風音楽のある天守閣 小山 健介
被災地の辛抱を削ぐ別れ雪 山本ひまわり
村いっばい梅の多重奏どの辻も 石橋いろり
止まぬ雨街の灯にじむ二月かな 山崎せつ子
ふる里や毒のなる樹のまた芽吹く 淵田 芥門
一面のてふてふ揺らす黒子かな 大森 敦夫
春空へ枝打つ庭師の命綱 西前 千恵

第3回 俳句研究会

3月30日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 水野星閣・秋山ふみ子・

西前千恵・山本ひまわり・

石原俊彦・尾崎太郎・満田光生

亀津ひのとり

参加者22名

★新会長挨拶 水野星閣氏

蟹気楼よりもとほくに生家かな 大石 雄鬼
大辞林をさまよひ歩く日永かな 亀津ひのとり

水たまり飛びこす子らや葱坊主 西前 千恵

暖かや硯の面の小さき波 水野 星闇

逝くときは母が手を引く山桜 根岸 操

図書館の読書老人春眠し 石原 俊彦

春北風バス待つ列の乱れけり 山本ひまわり

青鷺の一步一步に氣迫あり 根岸 敏三

白木蓮救急病棟の間に咲く 石橋いろり

大地ゆれ帰る家なし燕来る 高瀬多佳子

春の宵紅さし指を深爪す 淵田 芥門

桜愛づ人肌爛の一含み 三浦 土火

芽木の風えいえいと起工せり 小山 健介

崖に草かくはいづこより爆音 満田 光生

若き日の別れの海や夕霞 中田 瑛子

国会中継見るともなしに春の風邪 秋山ふみ子

そんなこと笑いとばして四月馬鹿 戸川 晟

春風大江戸中の犬どこへ 広井 和之

片思い片栗の花うつ向いて 松元 峯子

蝌蚪の群泳ぐ水面に昼の月 尾崎 太郎

護摩行や齡五百の糸桜 青木 隆

春の雷医師の大声アイシユー 飯田 玉記

第4回 俳句研究会

4月27日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 大森敦夫・秋山ふみ子・

玉木康博・小山健介

石橋いろり・青木隆・尾崎太郎

参加者24名

★講話……水野星闇氏

「わが俳句事始めと職場句会」

才能といふ名の病 蝗草 小山 健介

迷いなく天を指したる松の芯 根岸 敏三

のどけしや点滴棒を連れ歩く 亀津ひのとり

犬に天寿木香薷薇はいま盛り 稲吉 豊

犬に天寿木香薷薇はいま盛り 稲吉 豊

お花見は一人ブランコ漕ぎながら 飯田 玉記

みどりみどりホップステップもうできぬ 松元 峯子

鶯の声数へつつ谷戸の道 佐々木克子

眠るには力要りたる若葉かな 尾崎 太郎

満天星や風に星語を弾き出す 根岸 操

春になる笑い上戸の君になる 森本由美子

万愚節すぐに判るも乗ってみる 戸川 晟

少女らの立ち話桜蕊降る 三浦 土火

平づみの官能小説春をしむ 秋山ふみ子

鶯餅指の先より青い鳥 淵田 芥門

ウクライナガザ能登花蓮仏生会 広井 和之

みどりの日皆スマホ見て無言 青木 隆

夕暮れに乾ぶ葉擦れや竹の秋 満田 光生

花水木風雨に揺るるうすみどり 中田 瑛子

非常口よりも小さく潮干狩 水野 星闇

水仙の茎まっすぐに立つ真昼 大石 雄鬼

アウトローの麦の穂あれど俳諧自由 山崎せつ子

二筋の飛行機雲が春を呼ぶ 石橋いろり

春酣朝五時過ぎの青緑 玉木 康博

第5回 俳句研究会

5月18日(土) 立川市子ども未来センター

担当幹事 石橋いろり・玉木康博・

満田光生・山本ひまわり・

亀津ひのとり・尾崎太郎

参加者16名

★講話なし

手を離す稚児の一、二歩夏来る 西前 千恵

たまさかの牛の太声麦の秋 稲吉 豊

百年を生きるこの子ら柿若葉 三浦 長閑

凡人に生まれ良かった豆ご飯 飯田 玉記

菖蒲湯や老いの膚にも全き香 水野 星闇

桑熟るる友ら消息散りぐくに 亀津ひのとり

ひっそりと一人静や今日大安 松元 峯子

網戸の目くづればじめて母の声 大石 雄鬼

立読みに時を忘れて若葉雨 尾崎 太郎

車窓こと若葉よスマホやめようよ 満田 光生

天下る受皿の数誘蛾灯 高瀬多佳子

終電車長閑な春に眠りこけ 玉木 康博

詰襟の坊や颯爽今年竹 戸川 晟

金属的な青き蝶は心音に 石橋いろり

葉桜やバギー押す手の皴深し 山本ひまわり

しもた屋の女将も老いぬ五月雨 淵田 芥門

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。(意見幹事担当)
「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「東京多摩」へと進んでください。

★第42回東京多摩地区俳句大会

日時 令和6年11月4日(月・祝)
会場 武蔵野スイングホール
(J.R.武蔵境駅北口)

投句 二句一組 千円(何組でも歓迎)
締切 9月2日(月)
講演 秋尾 敏先生
(詳細は別紙をご覧ください。)

★秋の吟行会

日時 令和6年10月13日(日)
場所 府中市郷土の森博物館
(詳細は別紙をご覧ください。)

★会員の現況(6月末現在)

220名(正会員174名・一般会員46名)
☆新入会員 4名(敬称略) *印は正会員
*吉田さとみ(小金井市) *印は正会員
*田村明通(立川市) *沼田博古(八王子市)
*平井葵(小金井市) *彰穂(国分寺市)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(新規入会の方は申し込み手続きが必要)。その他一般の方は年会費2千円です。お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」 編集担当幹事

青木 隆(隆) 満田 光生(光)
飛永百合子(百) 山崎せつ子(せ)
永井 潮(潮)

◇◇◇ご案内◇◇◇ 俳句研究会

第8回 8月24日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

立川駅南口徒歩13分

(とじ込みはがきの地図参照)

電話042・529・8682

第9回 9月28日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

第10回 10月26日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

(いずれも会費千円、出句三句)

○俳句研究会の会費は、四月から千円になりました。

原稿送り先の変更

「あけぼの集」の葉書の送り先が今まで山崎せつ子さんでしたが、次号から青木隆さんに変わります。

「一句鑑賞」原稿の送り先も前号から青木隆さんです。山崎せつ子さんには長い間会報担当幹事として両方を担当して頂き本当に疲れ様でした。

編集後記

☆初めて一句鑑賞欄を担当させて頂きました。鑑賞文を拝見しとても参考になりました。不慣れですが、よろしくお願いいたします。(隆)
☆今号より青木隆さんが編集に加われ、その丁寧な仕事ぶりに感服。「間に合えばいい」主義の私とは正反対。学ぶべき点が多い。(光)
☆コロナの前までは元気に句会にも出席出来ていた。コロナにはからなかったが、三年間の自粛は大きい。取り戻せない私の三年…。(百)
☆長い間担当した編集の仕事を下りさせて頂きます。自分と家族の健康上の理由です。励まして下さった皆様に深く感謝申し上げます。(せ)
☆山崎さんに届いた「あけぼの集」の葉書は校正や「あけぼの便り」を作るため最終的に私に送られるのだが、せつ子さん宛ファンレターの様なものも。長期にわたるご苦勞に深謝。(潮)
―題字は三橋敏雄氏―

令和六年八月一日発行

発行人 水野星間

編集人 永井 潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局
〒181-0015
三鷹市大沢2-1-107

大森敦夫方

TEL 090-9389-4821

E-mail hitemono@ybone.jp

印刷所 株式会社 清水工房
TEL 042-620-2626